

照応形の束縛に基づいたかき混ぜの派生について

梶 原 英 二*

1. 序 論

日本語は、語順が比較的自由な言語である。例えば、(1a)の目的語 *sono hon-o* が文頭に移動した結果、(1b)が派生される¹⁾。

- (1) a. Taroo-ga sono hon-o katta (koto)
b. Sono hon-o_i Taroo-ga t_i katta (koto)
(Saito: 1992: 70)

同様の移動現象は、節を越えても可能である。(2b)は、(2a)から埋め込み節の目的語 *sono hon-o* が埋め込み節を越えて、主節の文頭に移動したものである。

- (2) a. Hanako-ga [Taroo-ga sono hon-o katta] to omotteiru (koto)
b. Sono hon-o_i Hanako-ga [Taroo-ga t_i katta] to omotteiru (koto) (Saito: 1992: 70)

(1b)のような移動を短距離かき混ぜ、(2b)のような節を越える移動を長距離かき混ぜと言う。

さらに、かき混ぜは複数回適応することが可能である。(3a)は二重目的語構文であり、(3b)と(3c)は、(3a)から間接目的語 *Hanako-ni* と直接目的語 *sono hon-o* が、文頭に移動した結果、派生した文である。

- (3) a. Taroo-ga Hanako-ni sono hon-o ageta

(koto)

- b. Hanako-ni_j sono hon-o_i Taroo-ga t_j t_i ageta (koto)
c. Sono hon-o_i Hanako-ni_j Taroo-ga t_j t_i ageta (koto)

(3b)と(3c)が示すように、間接目的語と直接目的語の順番が入れ替わることも可能である。

かき混ぜについて、これまで多くの研究がなされてきた。主要な研究テーマの一つとして、かき混ぜの着地点がA位置であるのか、それともA'位置であるのか、つまり、かき混ぜがA移動であるのか、それともA'移動であるのかというものがあつた。この点に関して、Saito (1992: 95)は以下のように述べている。

- (4) a. Clause-internal scrambling is ambiguous between A and A' movement, while "long distance" scrambling must be A' movement.
b. A' scrambling differs from *wh*-movement and topicalization in that it is movement to a non-operator position.

(4a)では、節内のかき混ぜはA移動かA'移動か曖昧であり、長距離かき混ぜはA'移動であるとしている。(4b)では、かき混ぜが非演算子位置への移動であるという点で、かき混ぜは*wh*移動や話題化と異なっているとしている。

Saito (1992)以降、短距離かき混ぜの着地点はA位置とA'位置の両方の特徴があり、一方で、長距離かき混ぜの着地点はA'位置の特徴し

* 広島経済大学経済学部准教授

か示さないということを前提にして、多くの先行研究で様々な分析や提案がなされてきたように思われる。

本論文では、かき混ぜと束縛理論との関連、つまり照応形の束縛の観点から、かき混ぜの派生について考えてみたい。

本論文の構成は以下の通りである。第2章は、束縛理論について説明し、かき混ぜされた語句と束縛の関係について述べている。第3章は、先行研究を4つ紹介している。第4章は、先行研究でよく用いられる例文をインフォーマントチェックし、その結果をまとめている。第5章は、インフォーマントチェックの結果に基づいてかき混ぜの派生を提案している。第6章がまとめである。

2. 束縛理論とかき混ぜ

本章では、まず束縛理論について説明し、そして、かき混ぜされた語句が束縛にどうかかわってくるかを見ていくことにする。

2.1 束縛理論

束縛理論は、名詞句が文の中でどのように指示されているかを決める理論である。Chomsky (1981) が束縛理論を提唱して以来、数多くの議論がなされ、束縛理論も変化をしてきた²⁾。そのため、本論文では、標準的な束縛理論で用いられる概念(束縛・c 統御・束縛理論・領域)の定義として、Hornstein, Nunes, and Grohmann (2005: 78, 248) を採用している。一般的に、束縛は以下のように定義される。

(5) Binding

α binds β iff α c-commands and is coindexed with β .

(5) に示すように、 α が β を c 統御し、 α が β と同一指標を付けられたとき、 α は β を束縛

するという。束縛には A 束縛と A' 束縛がある。 α が A 位置にある場合は A 束縛、A' 位置にある場合は A' 束縛となる。また、束縛の中で重要な役割を果たす c 統御は以下のように定義される。

(6) C-command

α c-commands β iff

- (i) α does not dominate β ;
- (ii) β does not dominate α ;
- (iii) the first branching node dominating α also dominates β ; and
- (iv) α does not equal β .

(6) は、 α と β がお互いを支配せず、 α を支配する最初の枝分かれ節点が β を支配し、 α と β が同一でないとき、 α は β を c 統御すると規定している。束縛と c 統御を使って、束縛理論は以下のように定義される。

(7) Binding Theory

(i) Principle A

An anaphor (e.g. a reflexive or reciprocal) must be bound in its local domain.

(ii) Principle B

A pronominal must be free (not bound) in its local domain.

(iii) Principle C

An R-expression (e.g. name, a variable) must be free (everywhere).

(7) に示すように、束縛理論には三つの束縛原理がある。束縛原理 (A) は、照応形がその局所的領域内で束縛されていなければならないと規定している。照応形には「自分自身」のような再帰代名詞や「お互い」のような相互代名詞が含まれる。束縛原理 (B) は、代名詞がその局所的領域内で自由でなければならない (= 束

縛されてはいけない)と規定している。束縛原理 (C) は、R 表現が自由でなければならぬと規定している。R 表現とは、照応形や代名詞以外の名詞句である指示表現を指す。

束縛原理 (A) と (B) の中にある領域については、以下のように定義される。

(8) Domain

α is the domain for β iff α is the smallest IP (TP) containing β and the governor of β .

(8) に示すように、 α が β と β の統率子を含む最小の IP (TP) であるとき、 α は β の領域となる。本論文では、領域は β と β の統率子を含む最小の TP とする³⁾。

なお、束縛理論は、A 位置にある名詞句にだけ、つまり A 束縛にだけ適用される。以下、束縛理論の具体例を見てみよう。

- (9) a. [TP Taroo_F-wa zibunzisin_F-o semeta]
 b. *[TP Taroo_F-wa kare_F-o semeta]
 c. *[TP Taroo_F-wa Taroo_F-o semeta]

(9a) で、主語 *Taroo* は再帰代名詞 *zibunzisin* を c 統御し、*Taroo* と *zibunzisin* は同一指標を持っている。(5) の束縛の定義により、*Taroo* は *zibunzisin* を束縛する。この場合、*Taroo* は A 位置にあるので、A 束縛している。照応形 *zibunzisin* の領域は TP で、その中で *zibunzisin* が束縛されている。束縛原理 (A) を満たし、*Taroo* = *zibunzisin* と解釈される (9a) が文法的であることが説明される。(9b) では、主語 *Taroo* は代名詞 *kare* を c 統御し、両者に同一指標が付与されている。代名詞 *kare* の領域は TP で、その中で *kare* が *Taroo* によって束縛されている。これは束縛原理 (B) に違反することになり、*Taroo* と *kare* が同一人物を指す (9b) が

非文であることが説明される。(9c) では、主語 *Taroo* が目的語 *Taroo* を c 統御し、同一指標が二つの *Taroo* に付けられている。前者の *Taroo* が後者の R 表現である *Taroo* を束縛するので、束縛原理 (C) の違反となる。よって、主語の *Taroo* と目的語の *Taroo* が同一人物となる (9c) の非文法性が説明される。

以上を踏まえて、次節でかき混ぜと束縛理論のかかわりを見てみる。

2.2 短距離かき混ぜ

かき混ぜされた語句が、その着地点で束縛理論にかかわってくるがよく知られている。まずは、短距離かき混ぜの例を見てみる。

- (10) a. [Masao-ga [karera_F-ni [[otagai_F-no sensei]-o syookaisita]]] (koto)
 b. [Karera_F-ga [otagai_F-o hihansita]]] (koto) (Saito 1992: 74)

(10) において、*karera* が *otagai* を c 統御し、両者が同じ指標を持っているので、前者が後者を束縛している。照応形 *otagai* がその領域内で束縛され、束縛原理 (A) を満たしている。よって、(10) が文法的であることが説明される。

- (11) a. ?*[Masao-ga [[otagai_F-no sensei]-ni [karera_F-o syookaisita]]] (koto)
 b. ?*[[Otagai_F-no sensei]-ga [karera_F-o hihansita]]] (koto) (Saito 1992: 74)

(11) では、*karera* が *otagai* を c 統御していないので、前者が後者を束縛していない。そのため、照応形 *otagai* がその領域内で束縛されず、束縛原理 (A) の違反となる。その結果、(11) の非文法性が説明されることになる。

- (12) a. [Karera-o_i [Masao-ga [[otagai-no sensei]-ni [t_i syookaisita]]]] (koto)
 b. ?[Karera-o_i [[otagai-no sensei]-ga [t_i hihansita]]] (koto) (Saito 1992: 75)

(12) は, (11) から目的語 *karera-o* を文頭に移動させたかき混ぜ文である。(11) と (12) を比較すると, 後者の方が文の容認性が極めて高いことが分かる。(12) が容認可能であるということは, (11) で見られた束縛原理 (A) の違反が (12) では起こっていないことを示している。このことは, (12) のかき混ぜされた *Karera* が A 位置にあり, *otagai* を束縛し, 束縛原理 (A) を満たしているということを意味している。(12) の *Karera* が A 束縛子として機能しているということは, (12) のかき混ぜの移動は A 移動であり, その着地点も A 地点であるということになる。

以上, (12) は A 移動の短距離かき混ぜが存在している証拠となっているのである。

一方で, (12) とは逆のことが成り立つ場合があることも, Saito (1992: 76) によって指摘されている。

- (13) a. Hanako-ga zibunzisin-o hihansita (koto)
 b. Zibunzisin-o_i [Hanako-ga t_i hihansita] (koto)

(13a) では, 主語の位置にある *Hanako* が目的語の位置にある *zibunzisin* を束縛するので, *Hanako = zibunzisin* と解釈される。(13b) は, (13a) から *zibunzisin-o* を文頭に移動させたかき混ぜ文である。(13b) の構造は (12) とまったく同じである。つまり, (12) でかき混ぜされた語句が A 位置にあるのであるなら, (13b) でも同様に, かき混ぜされた語句 *Zibunzisin* は A 位置にあるはずである。もしそうだとすると,

Zibunzisin が *Hanako* を束縛し, 束縛原理 (C) に違反することになる。その結果, この文は誤って非文であると判断されてしまう。しかしながら, (13b) は完全に文法的な文である。(13b) が文法的であるということは, (13b) の *Zibunzisin* は A 位置ではなく, A' 位置にあるということになる。

なお, (13b) が文法的であることを説明するために, (13b) の LF において, 再構築という操作が適用される。再構築とは, LF で適用される規則であり, 移動した要素を痕跡がある元の位置に戻す操作のことである⁴⁾。(13b) の LF で再構築が適用されると, *Zibunzisin* は痕跡がある元の位置に戻され, (13a) と同じ構造になる。痕跡 *t* の位置に戻された *zibunzisin* は *Hanako* によって束縛される。よって, 束縛原理 (A) を満たし, 正しい解釈が得られる。

以上, (13b) は A' 移動の短距離かき混ぜが存在している証拠となっているのである。

(12) と (13b) は, 短距離かき混ぜにおいては, かき混ぜの着地点が A 位置として機能する場合もあれば, A' 位置として機能する場合もあるということを示している。

2.3 長距離かき混ぜ

長距離かき混ぜの場合を見てみる。

- (14) a. *[Masao-ga [otagai-no sensei]-ni [_{CP} [_{TP} Hanako-ga karera-o hihansita] to] itta] (koto)
 b. *[[Otagai-no sensei]-ga [_{CP} [_{TP} Hanako-ga karera-o hihansita] to] itta] (koto) (Saito 1992: 75)

- (15) a. *[Karera-o_i [Masao-ga [otagai-no sensei]-ni [_{CP} [_{TP} Hanako-ga t_i hihansita] to] itta]] (koto)
 b. *[Karera-o_i [[otagai-no sensei]-ga

[_{CP} [_{TP} Hanako-ga *t_i* hihansita] to]
itta]] (koto) (Saito 1992: 76)

(14) において, *otagai* は主節にあり, *karera* は埋め込み節の中にある。(11) の場合と同様に, (14) の *otagai* は *karera* によって c 統御されず, 束縛されていない。そのため, 束縛原理 (A) の違反となり, (14) の非文法性が説明される。

(15) は, (14) から埋め込み節の目的語 *karera-o* を, 埋め込み節を越えて主節の文頭の位置に移動させた長距離かき混ぜの文である。(12) のように, 文頭の *Karera-o* が A 位置にあるとしたら, *Karera* が *otagai* を束縛することになる。よって, 束縛原理 (A) を満たし, (15) は文法的な文であるということになる。しかしながら, Saito (1992) の判断では (15) は非文である。非文であるということは, *Karera-o* は A 位置にあるのではなく, A' 位置にあるということになる。束縛理論は A 束縛にしか適用されないので, *Karera-o* が A' 位置にあると, *Karera* が *otagai* を A 束縛することはない。LF で再構築が適用され, *Karera-o* は痕跡がある元の位置に戻される。痕跡 *t* の位置に戻された *karera* はその領域である埋め込み節の TP 内で束縛されていないので, 束縛原理 (B) を満たしている。しかし, 照応形 *otagai* には A 束縛子が存在せず, その領域である主節の TP 内で束縛されない。よって, 束縛原理 (A) に違反し, (15) の非文法性が説明される。

以上, (15) の非文法性は, 長距離かき混ぜが A' 移動であることを示している⁵⁾。

3. 先行研究

かき混ぜの派生については, これまでに様々な分析や提案がなされてきた。本章ではその中から 4 つを簡潔に紹介したい。

3.1 Saito (1992)

Saito (1992) は, かき混ぜの着地点が, ある条件のもとで性質が変わると提案している。かき混ぜは非演算子・非 A 位置 (a non-operator/non-A position) への一様な移動であると仮定している。そして, かき混ぜの着地点は TP 付加位置であり, その位置が非演算子・非 A 位置であるとしている。さらに, 非演算子・非 A 位置は LF ではなく S 構造で認可されると仮定している。そして, LF において, すべての NP 位置は A 位置か演算子位置となり, かき混ぜされた語句がある位置は LF で非演算子・非 A 位置のままであることができないと仮定している。そのため, 非演算子・非 A 位置は LF で次のような 3 つの可能性があると仮定している。

- (16) a. The position disappears at LF.
b. The position is reanalyzed as an operator position.
c. The position is reanalyzed as an A position. (Saito 1992: 99, 100)

(16a) は, かき混ぜされた語句が, LF で痕跡がある元の位置に戻されるということを表している。(16b) は, かき混ぜされた語句の位置が演算子位置として再分析されるということを表している。(16c) は, かき混ぜされた語句の位置が A 位置として再分析されるということを表している。(16) により, 日本語では非演算子・非 A 位置が, A 位置にでも A' 位置にでもなれることになる。(16) の適用例として, (15b) = (17a) と (12b) = (17b) を挙げている。

- (17) a. * [_{TP} Karera-o_i [_{TP} [otagai_i-no sensei]-ga [_{CP} [_{TP} Hanako-ga *t_i* hihansita] to] itta]] (koto)
b. ? [_{TP} Karera-o_i [_{TP} Masao-ga [[otagai_i-no sensei]-ni [*t_i* hihansita]]]] (koto)

(17) の *Karera-o* の着地点は TP 付加位置で、非演算子・非 A 位置である。しかしながら、LF で非演算子・非 A 位置のままにすることができない。そこで、(16a) を (17a) に適用すると、*Karera-o* は痕跡がある元の位置に戻される。その結果、*otagai* がその領域である主節の TP 内で束縛されず、束縛原理 (A) の違反となる。(16b) を (17a) に適応すると、*Karera-o* は演算子位置、つまり A' 位置にあることになるので、*otagai* を A 束縛することができない。*otagai* を c 統御する A 束縛子がないので、束縛原理 (A) の違反となる。(16c) を (17a) に適用すると、非演算子・非 A 位置が A 位置となり、*Karera* が *otagai* を束縛し、束縛原理 (A) を満たすことになる。この場合、束縛理論は満たすが、別の理由でこの派生は排除される。かき混ぜされた語句の位置が LF で A 位置となったら、かき混ぜされた語句とその痕跡の連鎖である (*Karera-o_i, t_i*) も A 連鎖になる。この連鎖の両者の間に CP という障壁が介在しているので、以下の条件により、適正な A 連鎖が形成されず、違反となる⁶⁾。

- (18) Each link of an A chain must be 0-subjacent. (I.e., no barrier can intervene between two members of a single A chain.) (Saito 1992: 100)

(17b) に (16a) と (16b) を適用した場合は、(17a) と同様に、束縛原理 (A) の違反となる。(17c) に (16c) を適用すると、A 位置にある *Karera* が束縛子として機能する。*Karera* が *otagai* を束縛し、束縛原理 (A) を満たす。(17a) とは異なり、(17b) には障壁となる CP が存在していない。そのため、(17b) の A' 連鎖は LF で A 連鎖として再分析され、(18) が要求する A 連鎖の局所性も満たされている。(17b) は容認可能であるため、(17b) は (16a) と

(16b) ではなく、(16c) を選択することになる。

3.2 Kikuchi, Oishi and Yusa (1994)

Kikuchi, Oishi and Yusa (1994) は、かき混ぜの着地点が、ある条件下で A' から A 位置に変わると提案している。日本語のかき混ぜは付加操作で、A' 移動であると仮定している。そして、かき混ぜは形態的に駆動された操作 (a morphologically driven operation) であるので、義務的であるとしている。さらに、かき混ぜされるすべての語句には [+SC (ramble)] というような強い素性が付与され、[+Tense] を持つ T は [+SC] を持つ場合があるとしている。

かき混ぜされた語句の位置が A' から A 位置に変わることを説明するために、Kikuchi, Oishi and Yusa (1994: 148) は、以下のような相対的 L 関連性 (Relativized L-relatedness) という概念を提案している。

(19) Relativized L-relatedness:

A position π is L-related iff α -related, β -related, or γ -related.

- a. α -related = *def* the specifiers and complements of V, A, N, P.
- b. β -related = *def* the specifiers and complements of AGR, T (and D).
- c. γ -related = *def* α is adjoined to β and β 's head includes a head γ to which a member of α 's chain is α -related.

かき混ぜが付加操作で A' 移動である以上、その位置は LF の前までは A' 位置である。しかし、(19c) に定義されているように、かき混ぜされた語句と L 関連性がある主要部が、かき混ぜされた語句が付加した範疇の主要部に含まれると、かき混ぜされた語句の位置が L 関連性を持つことになる。それによって、かき混ぜされた語句の位置が A' から A 位置になり、さらに、その

位置にある語句が A 束縛子として機能するとしている。

L 関連性という概念を用いて、目的語を文頭にかき混ぜた場合、短距離かき混ぜの LF での構造が (20a)、定形節からの長距離かき混ぜの LF での構造が (20b) のようになるとしている。

- (20) a. $[_{AGR-sP} OB_{[+SC]}] [_{AGR-sP} SU] [_{AGR-s} V] [_{AGR-s}$
 $+L \quad +L$
 $T_{[+SC]} AGR-s]] [TP t_T] [_{AGR-oP} t_{OB} t_V$
 $+L$
 $[_{VP} t_{SU} t_V t_{OB} \dots]]]]$
 $+L \quad +L$
- b. $\dots [_{AGR-sP1} OB_2] [_{AGR-sP1} SU_1] [_{AGR-s1} V_1$
 $+L_1$
 $[_{AGR-s} T_{1[+Tense/+SC]} AGR-s_1]] \dots$
 $[_{AGR-sP2} SU_2] [_{AGR-s2} V_2 T_{2[+Tense]} AGR-s_2]$
 $+L_2$
 $\dots t_{V2} t_{OB2} \dots] \dots] \dots$
- (Kikuchi, Oishi and Yusa 1994: 155–156)

(20a) で、 $[+SC]$ 素性を持った目的語が $AGR-oP$ の指定部を経由して、 $AGR-sP$ に付加している。目的語と L 関連性がある動詞が $AGR-s$ まで繰り上がっているため、かき混ぜされた語句は L 関連性を持ち、その位置が A 位置となる。一方、(20b) で、長距離かき混ぜされた埋め込み節の目的語は、L 関連性がある V_2 が $AGR-sP_1$ まで繰り上がらないため、L 関連性を持たない。その結果、かき混ぜされた語句の位置は付加位置のままとなる。

短距離かき混ぜの具体例として、(21) を見てみよう。

- (21) John to Bill- o_i [otagai- i -no titioya-ga
 [Mary-ni t_i tatak]-aseta]
 (Kikuchi, Oishi and Yusa 1994: 149)

かき混ぜは A' 移動であるため、(21) において、かき混ぜされた語句の位置は、かき混ぜが起こった派生の段階では L 関連性がない位置である。かき混ぜされた語句が付加している $AGR-sP$ の主要部が、*John to Bill-o* の痕跡と L 関連性がある動詞 *tataku* を含んでいないからである。 $AGR-s$ を含む T によって認可されるために、動詞は $AGR-s$ に繰り上がる。動詞繰上げ後、かき混ぜされた語句の位置は L 関連性を持つことになる。そして、その位置が A' から A 位置になり、かき混ぜされた語句が A 束縛子になる。その結果、*John to Bill* が *otagai* を束縛し、束縛原理 (A) を満たすことになる。よって、この文の文法性が説明される。

長距離かき混ぜの具体例は (22) である。

- (22) *Karera- o_i [Masao-ga [otagai- i -no
 sensei]-ni [Hanako-ga t_i hihansita to]
 itta] (koto)
 (Kikuchi, Oishi and Yusa 1994: 149)

(22) は (15a) と同一で、Saito (1992) から引用されている。かき混ぜが適用される前の段階では、*karera-o* は動詞 *hihansu* (*ru*) によって L 関連性を持っている。(21) とは異なり、この動詞は LF で主節の $AGR-s$ に繰り上がらない。埋め込み節の $AGR-sP$ の中に、T を持った $AGR-s$ があるからである。*Karera-o* が付加する主節の $AGR-sP$ の主要部である $AGR-s$ が、*Karera-o* の痕跡と L 関連性がある主要部を含まないため、かき混ぜされた語句の位置は L 関連性を持たないままである。よって、*Karera* は A' 位置にあることになり、照応形 *otagai* は束縛されない。束縛原理 (A) の違反となり、(22) の非文法性が説明される。

3.3 Nemoto (1993)

Nemoto (1993) は、かき混ぜの着地点として

A 位置と A' 位置の両方を提示している。Nemoto (1993) は、かき混ぜされた語句が主語を越える場合と越えない場合でふるまい方に違いがあり、A 移動のような振る舞いをするのは、かき混ぜされた語句が主語を越えない場合であることに着目し、かき混ぜを3種類に分類している。かき混ぜされた語句が主語を越えないものを S-scrambling, 主語を越えるものを M-scrambling, 定形節からの長距離かき混ぜを L-scrambling と分類している。S-scrambling は A 移動, L-scrambling は A' 移動としている。M-scrambling は、A 位置である AGRoP の指定部を経由する A' 移動であると仮定している。以下の例を見てみよう⁷⁾。

- (23) a. Joe-ga Michael_i-no sensei-ni kare_i-o syookaisita
 b. ?*[Kare-o_i Joe-ga Michael_i-no sensei-ni t_i syookaisita (Nemoto 1993: 99, 100)

(23a) の直接目的語 *kare-o* が、主語を越えて文頭に移動したのが (23b) である。(23b) は M-scrambling であり、A' 移動である。(23b) の LF で再構築が適用されると、*Kare-o* は痕跡がある元の位置に戻される。そうすると、(23b) の LF は (23a) の構造と同一になる。この場合、代名詞 *kare* はその領域内で束縛されず、束縛原理 (B) を満足することになる。その結果、(23b) が文法的であるということになり、その非文法性を説明できなくなってしまう。そこで、Nemoto (1993: 106) は次のような派生を仮定している。

- (24) [NP (DO) [NP (SUB) [AGRoP t_i] NP (IO) t_i]]

(24) に示すように、直接目的語 NP (DO) は、

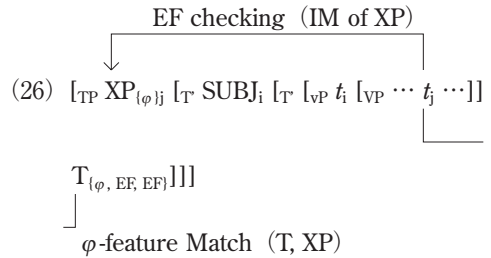
痕跡がある元の位置から直接主語を越えて移動するのではなく、AGRoP の指定部を経由するのである。(24) の派生を (23b) に適用すると、以下のようにになる。

- (25) ?*[Kare-o_i [Joe-ga [AGRoP t_i] Michael_i-no sensei-ni t_i syookaisita]]

この構造において、再構築が適用されるのは痕跡 *t* がある元の位置ではなく、AGRoP の指定部 *t*' の位置である。AGRoP の指定部は A 位置であり、この位置に戻された *kare* が *Michael* を束縛することになる。この束縛は束縛原理 (C) の違反を引き起こす。よって、この文の非文法性が説明される。

3.4 Mizuguchi (2010)

Mizuguchi (2010: 70) は、かき混ぜが A 移動と A' 移動の両方の特性を持つことについて、以下のような派生を提案している。



(26) は多重指定部 (multiple-Spec) 構造となっている⁸⁾。Mizuguchi (2010) は日本語には多重主語が TP の指定部にあり、TP に多重指定部があると仮定している。この構造において、TP の内側の指定部に主語が、TP の外側の指定部にかき混ぜされた語句 XP がある。かき混ぜされた語句 XP は、A 移動の繰り上げのように、TP の外側の指定部に移動している。XP の位置は、かき混ぜに A 移動の特性があることを示している。一方で、T とかき混ぜされた XP との間に、

め素性の一致がないことによって、A' 移動の特性が説明されるとしている。

以上、本章では、4つの先行研究を見てきた⁹⁾。

4. インフォーマントチェックの結果

本章では、先行研究でよく用いられるかき混ぜの例文をインフォーマントチェックし、かき混ぜの移動についてさらに考察していく。

4.1 短距離かき混ぜの例文

短距離かき混ぜの着地点がA位置特性を示す文である(12)を、6人のインフォーマント¹⁰⁾にチェックしてもらった。その結果は以下のようになった。

12a (○)	○	*	*	*	?	*
12b (?)	*	*	?	?	○	?

左端の列で例文番号の後の()の中に入っているのは、Saito (1992)の判断である。(12a)では、1人のインフォーマントが文法的、1人が微妙、4人が非文という判断になった。(12b)では、1人のインフォーマントが文法的、3人が微妙、2人が非文という判断になった。この表を見ると、Saito (1992)の判断と異なる判断をしたインフォーマントが多いことが分かる。短距離かき混ぜの着地点がA位置特性を示す(12)において、その特性を認めていないインフォーマントが多いという結果になったのである。つまり、Saito (1992)の判断では、(12)の*Karera-o*はA位置にあるとなっていたが、ある話者にとっては、(12)のかき混ぜの移動はA'移動であり、着地点もA'位置であるということになる。

次に、直接目的語の照応形が短距離かき混ぜされた文を見てみよう。

- (27) a. Joe-ga [Michael-to Janet]_i-ni otagai-o syookaisita
 b. *otagai-o Joe-ga [Michael-to Janet]_i-ni t_i syookaisita
 c. *Joe-ga otagai-o [Michael-to Janet]_i-ni t_i syookaisita (Nemoto 1993: 96)

(27a)は、二重目的語構文である。(27a)において、*Michael-to Janet*が*otagai*を束縛するので、束縛原理(A)を満たしている。よって、(27a)が文法的であると判断される。

(27b)は、(27a)から直接目的語*otagai-o*が文頭に移動したかき混ぜ文である。*otagai-o*がA'位置にあるとすると、LFでの再構築により*otagai-o*がその痕跡がある元の位置に戻される。そうすると、*Michael-to Janet*が*otagai*を束縛し、束縛原理(A)を満たすことになる。その結果、(27b)は文法的であると判断されることになる。しかし、Nemoto (1993)の判断では、(27b)は非文である。この文が非文であるということは、*otagai-o*がA位置にあるということになる。この場合、*otagai*が*Michael-to Janet*を束縛し、束縛原理(C)の違反となる。また、*otagai*が束縛されず、束縛原理(A)の違反も引き起こす。よって、(27b)の非文法性が正しく説明される。(27b)が非文であるということは、(27b)がA'移動であるということを示している¹¹⁾。

(27c)では、直接目的語*otagai-o*が間接目的語*[Michael-to Janet]-ni*を越えて移動している。*otagai-o*がA位置にあるとしたら、*otagai*は束縛されず、束縛原理(A)の違反となる。さらに、*otagai*が*Michael-to Janet*を束縛し、束縛原理(C)にも違反する。よって、この文が非文であると証明される。もし*otagai-o*がA'位置にあるとしたら、LFで再構築が適用される。*otagai-o*はその痕跡がある元の位置に戻され、その位置で*Michael-to Janet*によって束縛され

る。束縛関係が成立するので、非文の説明ができなくなってしまう。したがって、(27c)の非文法性は、かき混ぜされた要素がA位置にあることを示している。

(27b)と(27c)もインフォーマントに確認してもらおうと、以下のような結果になった。

27b (*)	?	○	?	*	○	○
27c (*)	?	○	○	*	?	?

左端の列で例文番号の後の()の中に入っているのは、Nemoto (1993)の判断である。(27b)では、3人のインフォーマントが文法的、2人が微妙、1人が非文という結果であった。(27c)では、2人が文法的、3人が微妙、1人が非文という結果になった。この結果は、Nemoto (1993)の判断と逆の判断をしている話者が多く存在していることを示している。(27b)や(27c)を容認する話者は、それらのかき混ぜがA'移動していると解釈していることになる¹²⁾。このインフォーマントチェックの結果は、かき混ぜの着地点が話者によって異なる可能性があることを示している。

A'移動の短距離かき混ぜの証拠となっている(13b)を、インフォーマントにチェックしてもらおうと、以下のような結果になった。

13b (○)	○	○	?	○	○	○
---------	---	---	---	---	---	---

左端の列で例文番号の後の()の中に入っているのは、Saito (1992)の判断である。この例文に関しては、1人を除いて全員がすぐにZibunzisinとHanakoが同一人物であると解釈できると判断した。この結果は、(13b)がA'移動であるということを示していると言える。

短距離かき混ぜについては、元々、A位置とA'位置の曖昧性が指摘されてきた。インフォーマントチェックの結果、A'移動の短距離かき混

ぜであると先行研究で判断されてきた文を、A'移動であると解釈をする話者がいるということが分かった。一方で、A'移動の短距離かき混ぜであると先行研究で判断されてきた文は、インフォーマントチェックでもA'移動であるということが分かった。

4.2 長距離かき混ぜの例文

長距離かき混ぜの着地点がA'位置特性を示す文である(15)を、インフォーマントがどう判断したかを見てみよう。

15a (*)	○	?	×	×	?	×
15b (*)	○	○	×	×	○	?

左端の列で例文番号の後の()の中に入っているのは、Saito (1992)の判断である。(15a)では、1人のインフォーマントが文法的、2人が微妙、3人が非文という判定をした。(15b)では、3人のインフォーマントが文法的、1人が微妙、2人が非文という判定をした。上記の表は、短距離かき混ぜの場合と同様に、Saito (1992)の判断とインフォーマントの判断が異なる場合が少なからず存在することを示している。Saito (1992)では、長距離かき混ぜの着地点がA'位置であるので、(15)は非文法的であるという判断であったが、インフォーマントの中には(15)を容認する話者も存在するという結果になった。特に、(15b)を容認するインフォーマントが多いことは特筆すべきことである。(15b)では、Karera-oとotagaiが隣接しているので、束縛関係が成立すると判断しやすくなっているからであると推測される。一方、(15a)では、Karera-oとotagaiの間に、主語のMasao-gaが介在しているので、両者の束縛関係が成立しにくいと判断したと推測される。

(15)を容認する話者が存在するという事は、(15)のかき混ぜをA'移動ではなく、A移

動としてとらえているということを示している。

長距離かき混ぜの着地点が A 位置として解釈されうることを支持するもう一つの例を、挙げてみる。

(28) Kare-o_i [Taroo_j-ha [Hanako-ga t_i kiratteiru] to omoikondeiru] (三原 1994: 163)

(28) において、*Kare* と *Taroo* は同一指標を持っているので、同一人物として解釈される。(28) は (15) と同様の構造になっている。*Kare-o* が A 位置にあると、*Kare* が *Taroo* を束縛し、束縛原理 (C) の違反となる。その結果、この文は非文であると判断されることになる。しかし、三原 (1994) の判断では、この文は文法的である。そこで、三原 (1994) は、*Kare-o* が A' 位置にあるとしている。LF で再構築が適用され、*Kare-o* はその痕跡がある元の位置に戻される。埋め込み節に戻された *kare* は主節の *Taroo* を束縛できないので、束縛原理 (C) に違反することはない。そして、代名詞 *kare* は、その領域である埋め込み節の TP 内で束縛されていないので、束縛原理 (B) を満たすことになる。よって、この文の文法性が説明されるとしている。

しかしながら、この例文を 6 人のインフォーマントにチェックしてもらうと、以下に示すように、実に興味深い結果になった。

28 (○)	*	*	*	*	?	?
--------	---	---	---	---	---	---

左端の列で例文番号の後の () の中に入っているのは、三原 (1994) の判断である。4 人のインフォーマントがこの例文を非文法的であると判断し、2 人は微妙という判定になった。特に、非文と判断した 4 人は、*Kare* と *Taroo* が同一人物であると認定することができなかった。*Kare* と *Taroo* が同一人物であるなら非文、別人

であるなら正文という判断をした。また、三原 (1994: 163) も (28) を容認しない話者がいたと述べている。三原 (1994) は、長距離かき混ぜが A' 移動であるということの証拠として (28) を挙げたが、インフォーマントの結果はその逆であり、(28) のような長距離かき混ぜは A 移動であるということを示している。

(28) を容認しない話者は、*Kare-o* が A' 位置にあるのではなく、A 位置にあると解釈しているということになる。つまり、(28) を容認しない話者にとって、(28) の長距離かき混ぜは A' 移動ではなく、A 移動であると判断していることになる。

一部の話者にとって、長距離かき混ぜの着地点が A' 位置ではなく、A 位置であるということには実に驚くべきことである。長距離かき混ぜは A' 移動であるということに対して、これまでの先行研究で異議が唱えられたことはあまりないように思われる。しかしながら、今回のインフォーマントチェックの結果は、長距離かき混ぜにおいても、A 移動と判断される可能性があることを示している。

以上、インフォーマントの判断から、(12) も (15) もかき混ぜの着地点が、話者によって異なる場合があると言える。つまり、かき混ぜされた語句の着地点が、照応形の束縛に関してある話者は A 位置として、また別の話者は A' 位置として解釈しているということになる。

Saito (1992) が用いた (12) と (15) の例文は、多くの先行研究で Saito (1992) の判断のまま使用されてきているが、今回のインフォーマントチェックの結果は、かき混ぜの例文としてもう一度検討する余地があることを示している。また、前章で紹介した先行研究では、短距離かき混ぜでも長距離かき混ぜでも、話者によって A 移動・A' 移動の可能性があるという事実をうまく説明できないということになる。

5. かき混ぜの派生

前章のインフォーマントチェックの結果から、短距離かき混ぜでも長距離かき混ぜでも、A 移動と A' 移動の両方の派生を認めるのが望ましいと言える。そこで、梶原 (1996: 191) の多重指定部構造によるかき混ぜの分析を本論文では採用することにする。主語を越えるかき混ぜの派生は以下のようになる¹³⁾。

- (29) a. [_{TP} XP_i [_{TP} SUBJ [_{vP} t'_i [_{v'} t_{SUBJ} [_{VP} ... t_i ...]]]]]
 b. [_{TP} XP_i [_{TP} SUBJ [_{vP} t_{SUBJ} [_{VP} ... t_i ...]]]]

(29a) は A 移動のかき混ぜの場合である。かき混ぜされた語句 XP は、vP の外側の指定部を経由し、TP の外側の指定部に移動している。一方、(29b) は A' 移動のかき混ぜの派生である。かき混ぜされた語句 XP は TP に付加している。

(29) を使うと、(12a) = (30a) の派生は (30b) と (30c) のようになる。

- (30) a. [Karera-o_i [Masao-ga [[otagai_i-no sensei]-ni [t_i syookaisita]]]] (koto)
 b. [_{TP} Karera-o_i [_{TP} Masao-ga [_{vP} t'_i [_{v'} t_{SUBJ} [_{VP} otagai_i-no sensei-ni t_i syookaisita]]]]]
 c. [_{TP} Karera-o_i [_{TP} Masao-ga [_{vP} t_{SUBJ} [_{VP} otagai_i-no sensei-ni t_i syookaisita]]]]

(30b) は A 移動の派生である。この場合、A 位置である TP の外側の指定部に移動した *Karera* が *otagai* を束縛するので、束縛原理 (A) を満たす。よって、(30b) の移動は認められる。一方、(30c) は A' 移動の派生である。この場合、TP に付加した位置にある *Karera* は A' 位置にあ

るので、*otagai* を A 束縛することはない。LF で再構築が適用され、*Karera-o* は痕跡がある元の位置に戻される。しかし、痕跡 *t* の位置に戻された *karera* は *otagai* を c 統御できないので、*otagai* は束縛されない。その結果、束縛原理 (A) の違反となり、(30c) の移動は認められない。(12a) を容認する話者は (30b) を、容認しない話者は (30c) の派生を選択することになる。

(12b) = (31a) も同様に説明される。(31a) には (31b) と (31c) の派生がある。

- (31) a. [Karera-o_i [[otagai_i-no sensei]-ga [t_i hihansita]]] (koto)
 b. [_{TP} Karera-o_i [_{TP} [otagai_i-no sensei]-ga [_{vP} t'_i [_{v'} t_{SUBJ} [_{VP} t_i hihansita]]]]]
 c. [_{TP} Karera-o_i [_{TP} [otagai_i-no sensei]-ga [_{vP} t_{SUBJ} [_{VP} t_i hihansita]]]]

(31b) では、*Karera-o* が TP の外側の指定部に A 移動している。*Karera* が *otagai* を束縛し、束縛原理 (A) を満たしている。そのため、この派生が容認される。一方で、(31c) は *Karera-o* が TP に付加している。A' 位置にある *Karera-o* は *otagai* を A 束縛しない。LF で再構築が適用され、痕跡 *t* の位置に戻された *karera* は主語の位置にある *otagai* を束縛できない。よって、束縛原理 (A) に違反し、この派生は認められない。(12b) を容認する話者は (31b) を、容認しない話者は (31c) の派生を選択することになる。

次に、二重目的語構文の例である (27) = (32) を見てみる。

- (32) a. Joe-ga [Michael-to Janet]_i-ni otagai_i-o syookaisita
 b. otagai_i-o Joe-ga [Michael-to Janet]_i-ni t_i syookaisita
 c. Joe-ga otagai_i-o [Michael-to Janet]_i-ni

t_i syookaisita

(32b) は, Nemoto (1993) の判断では非文であるが, 3人のインフォーマントが容認できると答えている。(32b)も, 以下に示すように, 二通りの派生を考える必要がある。

- (33) a. [_{TP} otagai-o [_T Joe-ga [_{vP} t_i [_{v'} t_{SUBJ} [_{VP} [Michael-to Janet]_I-ni t_i syookaisita]]]]]]
 b. [_{TP} otagai-o [_{TP} Joe-ga [_{vP} t_{SUBJ} [_{VP} [Michael-to Janet]_I-ni t_i syookaisita]]]]]

(33a) では, *otagai-o* が TP の外側の指定部に A 移動しているので, *otagai* が束縛されず, 束縛原理 (A) に違反することになる。また, *Michael-to Janet* が *otagai* に束縛され, 束縛原理 (C) にも違反する。よって, この構造は認められない。(33b) では, *otagai-o* が TP に付加した A' 移動となっている。LF で再構築が適用され, *otagai-o* がその痕跡がある元の位置に戻される。そうすると, その位置で *otagai* が *Michael-to Janet* によって束縛される。束縛原理 (A) を満たすので, この構造は許される。(32b) を容認しない話者は (33a) の派生を選択し, 容認する話者は (33b) の派生を選択することになる。

同様に, (32c) にも以下の二通りの派生がある。

- (34) a. [_{TP} Joe-ga [_{vP} otagai-o [_{v'} t_{SUBJ} [_{VP} [Michael-to Janet]_I-ni t_i syookaisita]]]]]
 b. [_{TP} Joe-ga [_{vP} otagai-o [_{vP} t_{SUBJ} [_{VP} [Michael-to Janet]_I-ni t_i syookaisita]]]]]

(34a) では, *otagai-o* が vP の外側の指定部に移

動している。この移動は A 移動であり, *otagai* が *Michael-to Janet* によって束縛されない。その結果, 束縛原理 (A) の違反を引き起こす。また, *otagai* が *Michael-to Janet* を束縛するので, 束縛原理 (C) の違反にもなる。よって, この派生は破綻することになる。一方, (34b) では, *otagai-o* が vP に付加している。この移動は A' 移動であり, LF で再構築が適用される。*otagai-o* はその痕跡がある元の位置に戻されるので, *otagai* が *Michael-to Janet* によって束縛される。よって, 束縛原理 (A) を満足し, この派生が容認される。(32c) を容認しない話者は (34a) の派生を選択し, 容認する話者は (34b) の派生を選択することになる。

次に, 長距離かき混ぜの派生を見てみる。(15a) = (35a) の派生は, 以下に示すように, (35b) と (35c) のようになる¹⁴⁾。

- (35) a. [Karera-o_i [Masao-ga [otagai-no sensei]-ni [_{CP} [_{TP} Hanako-ga t_i hihansita] to] itta]] (koto)
 b. [_{TP} Karera-o_i [_{T'} Masao-ga [_{vP} t_i [_{v'} t_{SUBJ} [_{VP} [otagai-no sensei]-ni [_{CP} [_{TP} Hanako-ga [_{vP} t_{Subj} [_{VP} t_i hihansita]]]]]] to] itta]]]]]
 c. [_{TP} Karera-o_i [_{TP} Masao-ga [_{vP} t_{SUBJ} [_{VP} [otagai-no sensei]-ni [_{CP} [_{TP} Hanako-ga [_{vP} t_{Subj} [_{VP} t_i hihansita]]]]]] to] itta]]]]]

(35b) では, *Karera-o* が主節の TP の外側の指定部に移動している。この位置は A 位置であり, *Karera* が *otagai* を束縛する。束縛原理 (A) を満たすので, (35b) は適格な構造となる。(35c) では, *Karera-o* が主節の TP に付加している。この位置は A' 位置であるので, *Karera* は A 束縛子として機能しない。LF で再構築が行われると, *Karera-o* はその痕跡がある

元の位置に戻される。埋め込み節に戻された *karera* は主節の *otagai* を束縛できず、束縛原理 (A) の違反となる。その結果、(35c) は不適格な構造となる。(35a) を容認する話者は (35b) の派生を選択し、容認しない話者は (35c) の派生を選択することになる。

最後に、(15b) = (36a) も、二通りの派生 (36b) と (36c) がある。

- (36) a. [Karera-o_i [[otagai_i-no sensei]-ga [CP [TP Hanako-ga t_i hihansita] to] itta]] (koto)
- b. [TP Karera-o_i [T [otagai_i-no sensei]-ga [vP t'_i [v' t_{SUBJ} [VP [CP [TP Hanako-ga [vP t_{Subj} [VP t_i hihansita]]] to] itta]]]]]]]
- c. [TP Karera-o_i [TP [otagai_i-no sensei]-ga [vP t_{SUBJ} [VP [CP [TP Hanako-ga [vP t_{Subj} [VP t_i hihansita]]] to] itta]]]]]

(36b) では、主節の TP の外側の指定部に A 移動した *Karera* が *otagai* を束縛している。束縛原理 (A) を満たし、この構造が適格であると判断される¹⁵⁾。(36c) では、主節の TP に A' 移動した *Karera* は *otagai* を A 束縛しない。また、LF で再構築が行われると、*Karera-o* が埋め込み節内に戻されてしまうので、主節の *otagai* は束縛されない。その結果、束縛原理 (A) の違反を引き起こし、この構造が不適格であると判断される。(36a) を容認する話者は (36b) の派生を選択し、容認しない話者は (36c) の派生を選択することになる。

以上、かき混ぜに二通りの派生を仮定すると、先行研究の判断とインフォーマントの判断を正しく反映させることができる。

6. ま と め

本論文では、照応形の束縛という観点から、かき混ぜの派生を分析した。短距離かき混ぜは

A 移動と A' 移動の両方の特性を示し、長距離かき混ぜは A' 移動の特性しか示さないという従来の方の考え方に対して、先行研究でよく用いられる例文のインフォーマントチェックを行った。その結果、長距離かき混ぜにおいても、かき混ぜされた名詞句が照応形の束縛子になり、照応形を束縛する解釈を認める話者がいることが分かった。このことから、長距離かき混ぜも A 移動と A' 移動の両方の特性を持つということを示した。かき混ぜに A 移動と A' 移動の両方の移動があるということになり、多重指定部構造を用いて、かき混ぜの派生を説明した。そして、かき混ぜの派生にも A 移動の派生と A' 移動の派生の両方があることを示した。かき混ぜに二種類の派生を認めることによって、先行研究の判断とインフォーマントの判断を説明することができることを示した。

注

- 1) Saito (1992: 70) では、(1b) は以下のような構造を持っている。

[_{IP} Sono hon-o_i [_{IP} Taroo-ga [_{VP} t_i katta]]] (koto)

(1b) では範疇表記は必要ないと判断し、省略している。Saito (1992) は IP という範疇を用いているが、本論文では IP ではなく TP を採用している。そのため、Saito (1992) を引用し、範疇を表記する場合、本論文では IP を TP に書き換えている。

- 2) Chomsky (1991: 188, 211, 212) は、束縛理論を以下のように定義している。

(i) Binding Theory

(A) An anaphor is bound in its governing category

(B) A pronominal is free in its governing category

(C) An R-expression is free

(ii) governing category

β is a governing category for α if and only if β is the minimal category containing α , a governor of α , and a SUBJECT accessible to α

(iii) accessibility

α is accessible to β if and only if β is the c-command domain of α and assignment to β of the index of α would not violate (iv)

(iv) * $[\gamma \dots \delta \dots]$: where γ and δ bear the same index

ミニマリスト・プログラムの枠組みでは、束縛理

論を解釈規則として, Chomsky (1995: 100) は以下のように定義している。

(v) Binding Theory

- (A) If α is an anaphor, interpret it as coreferential with a c-commanding phrase in D.
 (B) If α is a pronoun, interpret it as disjoint from every c-commanding phrase in D.
 (C) If α is an r-expression, interpret it as disjoint from every c-commanding phrase.

詳細については, Chomsky (1981, 1995) を参照。

3) 局所的領域について, Radford (2004: 101-102) も TP を想定しており, 束縛原理を以下のように仮定している。

- A: An anaphor (like *himself*) must be bound by (i.e. must refer to) a c-commanding constituent within the closet TP immediately containing it
 B: A pronoun (like *him*) must not be bound by (i.e. must not refer to) any c-commanding constituent within the closet TP immediately containing it
 C: An R-expression (i.e. a reference noun expression like *John/the president*) must not be coreferential to (i.e. must not refer to the same entity as) any c-commanding expression within the overall tree structure containing it

4) 日本語のかき混ぜされた語句が, LF で痕跡がある元の位置に戻されるということは, Saito (1989) によって提案された。

- (i) a. [Which picture of himself]_j does John_i like t_j best
 b. Himself_j, John_i loves t_j
 c. [[zibun_i-no hahaoya]_o_i [John_i-ga [t_j aisiteiru]]] (koto) (Saito 1989: 186)

再構築は, 元々, (ia) や (ib) のような英語の文を救済するために提案されたものである。(ia) や (ib) において, 再帰代名詞の *himself* は, 束縛子である *John* によって c 統御されておらず, 束縛されていない。束縛原理 (A) に違反し, 誤って非文であると判断されることになる。しかしながら, (ia) や (ib) は完全に文法的な文である。そこで, 再構築という操作が提案された。これによって, 移動した語句がその痕跡がある元の位置に戻され, その位置で *John* が *himself* を束縛する。よって, 束縛原理 (A) が満たされ, (ia) と (ib) が文法的であることが説明される。日本語のかき混ぜも同様に, (ic) の LF で再構築が適用される。そうすると, *zibun* が *John* によって束縛され, 束縛原理 (A) を満たし, (ic) が文法的であると説明される。なお, 再構築は A' 移動で移動された語句に適用される。

5) Ueyama (1994) は, 短距離かき混ぜされた名詞

句と同様に, 長距離かき混ぜされた名詞句も照応形の束縛子になれるとしている。

6) Chomsky (1986: 14, 15) は, 障壁に関する概念を以下のように定義している。

- (i) Barrier
 γ is a barrier for β iff (a) or (b):
 a. γ immediately dominates δ , δ a BC for β ;
 b. γ is a BC for β , $\gamma \neq \text{IP}$
 (ii) Blocking Category (BC)
 γ is a BC for β iff γ is not L-marked and γ dominates β
 (iii) L-marking
 α L-marks β if α is a lexical category that θ -governs β

障壁は (ii) の阻止範疇によって, 阻止範疇は (iii) の L 表示によって定義される。障壁には (ia) で定義される継承障壁と (ib) によって定義される固有障壁がある。詳細については, Chomsky (1986) を参照。

7) Nemoto (1993: 99) は, 以下に示すように, 指標として数字を使っているが, 本論文ではローマ字に置き換えている。

Joe-ga Michael_i-no sensei-ni kare_i-o syookaisita

8) Chomsky (1995: 286) は多重指定部構造を以下のように定義している。

[_{XP} ZP(= Spec1) [_{X'} WP(= Spec2) [_X X(= Head) YP(= Complement)]]]

9) その他にも数多くの先行研究がある。例えば, Ueyama (1994) は, 日本語のかき混ぜは格によって駆動されない一様な移動 (a non-Case-driven uniform movement) だと仮定している。かき混ぜの連鎖は, その D 構造の位置で格を付与されている。一方で, Miyagawa (1995) は, かき混ぜが義務的な移動であり, 格・一致 (A 移動) が焦点 (A' 移動) のいずれかによって駆動されるとしている。また, Tonoike (1997) は, (i) のように, かき混ぜが基底生成されると提案している。

(i) [_{IP} Mary_o_i [_{IP} John-ga *pro*_i nagut-ta]] (Tonoike: 1997: 130)

かき混ぜされた語句 *Mary-o* は, IP 付加位置に付加詞として基底生成され, 本来 *Mary-o* がある位置にあるゼロ代名詞 *pro* を束縛している。

10) 6人のインフォーマントは, 筆者の同僚であり, 全員語学を担当している教員である。今回, 生成文法についての知識をあまり持っていない人を選んだ。生成文法の知識があると, 文の容認性の判断に支障をきたすのではないかと懸念したためである。

11) Nemoto (1993) の分析では, (27b) は M-Scrambling であり, (i) のように, AGRoP の指定部を経由する A' 移動となっている。

(i) *otagai_i-o Joe-ga [_{AGRoP} t_i] [Michael-to Janet]_i-ni t_i syookaisita

LF で再構築が適用されると, *otagai_i-o* が AGRoP

の指定部まで戻される。AGRoP の指定部は A 位置であり、*otagai* が [Michael-to Janet] を束縛する。これは束縛条件 (C) の違反になる。また、*otagai* は束縛されないので、束縛原理 (A) の違反にもなる。よって、(i) の非文法性が説明される。なお、本論文では、Nemoto (1993) の分析を採用していない。

- 12) Nemoto (1993) の分析では、(27b) は A' 移動となっている。しかしながら、注の11) で示したように、Nemoto (1993) は (27b) を非文として排除する。そのため、Nemoto (1993) は (27b) を認める話者がいることを説明することができない。また、以下の対比も説明できない。

- (ii) a. ?*[Otagai-no sensei]-ga [karera-o hihansita] (koto)=(11b)
 b. ?[Karera-o_i [Otagai-no sensei]-ga [_{t_i} hihansita]] (koto)=(12b)

Nemoto (1993) の分析では、A' 移動である M-Scrambling の場合、主語の前に A 位置が存在していない。そのため、(iib) は注の11) の (i) と同様に非文であると判断され、(iib) の容認性を説明することができない。

- 13) (29) において、SUBJ は主語を、 t_{SUBJ} はその痕跡を表している。主語は、 vP の指定部から TP の指定部に移動している。なお、主語も移動しているので、本来なら指標をつけるべきであるが、構造を簡潔に表記するために、本論文では主語とその痕跡に指標を付けていない。

- 14) (35b) と (35c) の派生において、議論を明確にするため、埋め込み節の中の派生を省略している。(35b) の派生は (i) のようになる。

- (i) [_{TP} Karera-o_i [_{TP} Masao-ga [_{VP} t^1_i [_{v'} t_{SUBJ} [_{VP} [otagai-no sensei]-ni [_{CP} [_{TP} t^3_i [_{TP} Hanako-ga [_{VP} t^2_i [_{v'} t_{SUBJ} [_{VP} t^1_i hihansita]]]]]] to] itta]]]]]

(i) において、*Karera-o* は、埋め込み節の vP と TP の外側の指定部を経由して、主節の外側の vP の指定部へ、そして、最終着地点である主節の TP の指定部に A 移動している。一方、埋め込み節からの A' 移動である (35c) の派生は (ii) のようになる。

- (ii) [_{TP} Karera-o_i [_{TP} Masao-ga [_{VP} t_{SUBJ} [_{VP} [otagai-no sensei]-ni [_{CP} [_{TP} t^3_i [_{TP} Hanako-ga [_{VP} t^2_i [_{v'} t_{SUBJ} [_{VP} t^1_i hihansita]]]]]] to] itta]]]]]

(ii) において、*Karera-o* は、埋め込み節の TP や CP に付加し、主節の TP に付加している。なお、埋め込み節からの移動が (i) や (ii) のような派生をするかどうかについては、移動に関する様々な条件や理論が関与してくるので、今後さらに検討していきたい。

- 15) (35b) と (36b) において、A 移動の長距離かき混ぜを認めると、(17) で Saito (1992) が指摘したように、埋め込み節の CP が障壁として介在することになる。束縛理論は満たすが、下接の条件の違反になり、(35b) と (36b) は不適格な派生と

なってしまう。障壁の定義を変更するなどの解決策があるかもしれないが、本論文では今後の課題としておく。

参考文献

- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hornstein, Nobert, Jairo Nunes, and Kleantes K. Grohmann. 2005. *Understanding Minimalism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kikuchi, Akira, Masayuki Oishi, and Noriaki Yusa. 1994. "Scrambling and Relativized L-Relatedness," *MIT Working Papers in Linguistics* 24, 141–158.
- Miyagawa, Shigeru. 1995. "Scrambling as an obligatory movement," *Proceedings of Nazan University International Symposium on Japanese Language Education and Japanese Language Studies*, 81–92. Nagoya: Nanzan University.
- Mizuguchi, Manabu. 2010. "On A- And A'-Movement Properties of Scrambling," *English Linguistics* 27, 60–79.
- Nemoto, Naoko. 1993. *Chains and Case Positions: A Study from Scrambling in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Radford, Andrew. 2004. *Minimalist Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Saito, Mamoru. 1989. "Scrambling as Semantically Vacuous A'-movement," in Mark Baltin and Anthony Kroch, eds. *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, 182–200. Chicago: University of Chicago Press.
- Saito, Mamoru. 1992. "Long Distance Scrambling in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 1, 69–118.
- Tonoike, Shigeo. 1997. "On Scrambling – Scrambling as a Base-generated Scopal Construction," in Shigeo Tonoike, ed. *Scrambling*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Ueyama, Ayumi. 1994. "Against the A/A'-movement dichotomy," in Norbert Cover and Henk van Riemsdijk, eds. *Studies on Scrambling: Movement and Non-Movement Approaches to Free Word-Order Phenomena*, 459–486. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 梶原英二. 1996. 「日本語のかき混ぜの着地点について」『NIDABA』25, 187–196.
- 三原健一. 1994. 『日本語の統語構造』東京：松柏社.
- 三原健一・平岩健. 2006. 『新日本語の統語構造』東京：松柏社.